

中間報告書

補助事業名	伝承を担うフィールドからまなび、ともにつくり、地域へつなぐアートマネジメント人材育成 ー伝統音楽・芸能の地域レガシーによる新たな価値創出を目指してー							
事業期間	令和5年4月1日～令和6年2月29日			大学名	東京音楽大学			
実施概要	<p>■令和5年度は「フィールドとともにつくる」をテーマとしている。「フィールドとともにつくる」にあたり、令和5年度の活動で想定する「フィールド」は、前年度と同じく、a)伝統音楽・芸能を伝承する個人・組織や、それを支える地域コミュニティを含む「伝承を担い未来につなげるフィールド(伝承を担うフィールド)」と、新たにb)文化芸術基本法にも有機的な連携が図られるべきと明示されている福祉や教育、多文化共生等の「連携し多様な実践を展開するフィールド(実践を展開するフィールド)」の二つを想定している。伝統音楽・芸能に係るアートマネジメント人材育成には、これら二つのフィールドを知り、両者を繋いでいく役割が求められる。</p> <p>■以上の課題意識から、伝統音楽・芸能の伝承をめぐる課題、および社会や地域が抱える課題に対応できる企画制作プログラムを開発するために、二つのフィールドを柱に置き、活動①基礎講座では、「伝承を担うフィールドとともにつくるための基礎講座」「実践を展開するフィールドとともにつくるための基礎講座」を、各分野の専門家の協力を得て、多角的に学べる講座を展開した。活動②実践セミナーにおいて、受講者は活動③企画制作研修と関連する伝統音楽・芸能を体験することでそれぞれの特長を学ぶとともに、ワークショップ等のノウハウも学んだ。企画制作研修では、前年度にすでに実践セミナーでフィールドワークを実施している伝統音楽・芸能団体、コミュニティを「伝承を担うフィールド」とし、それぞれに対し異なる関連分野及び連携する具体的な実践先を「実践を展開するフィールド」として三つのプロジェクトを用意した。受講生は申し込み時に三つのプロジェクトから一つを選択し、「伝承を担うフィールド」と「実践を展開するフィールド」の両方のフィールドワークを経て、それぞれのフィールドの関係者の協力を得ながら、企画立案・企画の実践をする。</p> <p>■上記で得られた成果をとりまとめ、令和6年1月27日に開催する報告会と、過年度事業で構築したプラットフォーム(TCM-JAM)において発信し、交流の場を展開する。</p>							
共催者名・後援者名・協賛者名等とその役割								
全活動合計	計画	実績	差	計画と実績の差異理由				
来場者	50	129	79	活動②(実践セミナー)と活動③(企画制作研修)はほぼ計画に近い実績であったが、予算減額に伴い基礎講座をオンライン開催に変更したところ、広域から受講申込みがあり、基礎講座の受講者が100名(9月末日時点)と大幅に増加した。また、基礎講座のうちの一つを対面企画で実施したところ、来場者数(育成対象者を含む)が計画を上回り、本事業への関心・ニーズの高さが伺えた。				
育成対象者	50	100	50					
育成対象者属性	属性	学生	実演家	文化施設職員	公共機関職員	民間団体職員	民間企業職員	その他
	人数	31	13	6	7	0	8	35
育成対象者具体的な職業	<ul style="list-style-type: none"> ●文化施設職員(事業企画担当者、プロデューサー) ●公共機関職員(産業振興財団にて国外へ日本の文化の紹介を担当、文化財団にて事業企画担当、文化財担当、中央官庁職員) ●民間企業職員(編集者、デザイナー、演出家) ●その他(小中高教員、大学教員、幼稚園教諭、フリーランスライターコンサルタント、音楽講師等) 							
アートマネジメント人材育成目標	申請時	<p>【人材育成の目標】</p> <p>情報環境のデジタル化が進む中で、伝統音楽・芸能を直接体験することの価値は以前にも増して高まっている。伝統音楽・芸能が生まれるフィールド(現場)のリアルな姿に直接触れ体験することは、制作者にとっても重要である。本事業をおして、学術的フィールドワーク理論を踏まえながら、その体験をマイクロツーリズムやフィールド間の連携に活かし、若い世代への関心喚起の方法などを学び、伝統音楽・芸能のリアルを社会に伝えられる人材を育成する。また、この分野のアートマネジメントでは、企画を立案実践する制作者は、「伝達」の役割のみならず、フィールドと社会をつなげ、社会への発信や交流についてフィールドからの相談にも応じられる「コーディネーター」の役割も求められていることから、両方の力を兼ね備えた人材の育成を本事業では目標とする。具体的に想定しているのは、ある伝統音楽・芸能に対して新たに外側の立ち位置から足を運ぶ者、あるいは身近な地元文化の捉えなおし・再発見を目的として近い立ち位置から足を運ぶ者(その伝承コミュニティには入っていない当該市区町村の自治体職員、文化事業担当者、一般居住者)である。</p> <p>以上の育成する人材目標に対して、9月末時点での活動①(基礎講座)、活動②(実践セミナー)、活動③(企画制作研修)の受講者の職業(学生をのぞく)は多岐に亘るが、職業としてアートマネジメントに従事していかなくとも、実演家としてあるいはフリーランスとしてアートマネジメントに係る活動を展開している人が多いことから、受講者層の受講の目的意識が明確であり、本事業での学びが受講者の社会における実践に直接生かされていく可能性が高いことが確認された。また、過去の受講歴がある受講生は2019年度～2021年度の3年間および2022年度あわせて27名いることから継続的な学びを求める受講生も一定数いることが確認できた。一方、受講生のうち大学教員と学生は、ほぼすべてが民俗芸能や伝統芸能、アートマネジメントを専門分野としていることから、本事業をモデルケースに他大学にいても両方の視点を持った人材の育成へとつながっていく可能性も期待できる。</p> <p>本学の強みは日本とアジアの伝統音楽・伝統芸能について、付属民族音楽研究所を中心に40年以上の研究と教育、そして公演やワークショップ等の実演に係る実績が豊富にある点であり、第一に全体のプログラム構成がこれらの多彩なノウハウを活かす構成となっている。また活動①～③の講師については、音楽・芸能と周辺領域(教育、多文化共生、まちづくり)の両方に専門分野を持つ本事業担当教員・研究員らの人脈を活かすことで、上記人材育成目標に向けた専門性の高いプログラム展開が達成できている。</p> <p>具体的に、令和5年度は、II「フィールドとともにつくる」をテーマとするにあたり、活動で想定する「フィールド」を前年度(令和4年度)と同じくa)伝統音楽・芸能を伝承する個人・組織やそれを支える地域コミュニティを含む「伝承を担い未来につなげるフィールド(伝承を担うフィールド)」と、新たに b)文化芸術基本法にも有機的な連携が図られるべきと明示されている福祉や教育、多文化共生等の「連携し多様な実践を展開するフィールド(実践を展開するフィールド)」の二つを想定した。伝統音楽・芸能に係るアートマネジメント人材育成には、これら二つのフィールドを知り、両者を繋いでいく役割が求められるという課題意識のもと、活動①(基礎講座)では各分野の専門家の協力を得て、多角的に学べる講座の展開が実現できた。また、活動②(実践セミナー)においては、伝統音楽・芸能を体験することでそれぞれの特長を学ぶとともに、ワークショップ等のノウハウも学んだ。9月に開始した活動③(企画制作研修)では、前年度(令和4年度)にすでに実践セミナーでフィールドワークを実施していた複数の伝統音楽・芸能団体、コミュニティを「伝承を担うフィールド」とし、障障者福祉、多文化共生、コミュニティマネジメントを「実践を展開するフィールド」として3つのプロジェクトを用意し、各フィールドへのフィールドワークとそれぞれのフィールドの関係者の協力を得ながら、企画立案・企画の実践に向けた準備をしている。</p>						
	達成状況	<p>◆9月末までのプログラムの中で人材育成について当初目標はすべて達成し、10月以降のプログラムに向けた準備においても達成している。</p> <p>この分野の企画を立案実践する制作者は、「伝達」の役割のみならず、フィールドと社会をつなげ、社会への発信や交流についてフィールドからの相談にも応じられる「コーディネーター」の役割も求められていることから、両方の力を兼ね備えた人材の育成を本事業では目標とする。具体的に想定しているのは、ある伝統音楽・芸能に対して新たに外側の立ち位置から足を運ぶ者、あるいは身近な地元文化の捉えなおし・再発見を目的として近い立ち位置から足を運ぶ者(その伝承コミュニティには入っていない当該市区町村の自治体職員、文化事業担当者、一般居住者)である。</p> <p>以上の育成する人材目標に対して、9月末時点での活動①(基礎講座)、活動②(実践セミナー)、活動③(企画制作研修)の受講者の職業(学生をのぞく)は多岐に亘るが、職業としてアートマネジメントに従事していかなくとも、実演家としてあるいはフリーランスとしてアートマネジメントに係る活動を展開している人が多いことから、受講者層の受講の目的意識が明確であり、本事業での学びが受講者の社会における実践に直接生かされていく可能性が高いことが確認された。また、過去の受講歴がある受講生は2019年度～2021年度の3年間および2022年度あわせて27名いることから継続的な学びを求める受講生も一定数いることが確認できた。一方、受講生のうち大学教員と学生は、ほぼすべてが民俗芸能や伝統芸能、アートマネジメントを専門分野としていることから、本事業をモデルケースに他大学にいても両方の視点を持った人材の育成へとつながっていく可能性も期待できる。</p> <p>本学の強みは日本とアジアの伝統音楽・伝統芸能について、付属民族音楽研究所を中心に40年以上の研究と教育、そして公演やワークショップ等の実演に係る実績が豊富にある点であり、第一に全体のプログラム構成がこれらの多彩なノウハウを活かす構成となっている。また活動①～③の講師については、音楽・芸能と周辺領域(教育、多文化共生、まちづくり)の両方に専門分野を持つ本事業担当教員・研究員らの人脈を活かすことで、上記人材育成目標に向けた専門性の高いプログラム展開が達成できている。</p> <p>具体的に、令和5年度は、II「フィールドとともにつくる」をテーマとするにあたり、活動で想定する「フィールド」を前年度(令和4年度)と同じくa)伝統音楽・芸能を伝承する個人・組織やそれを支える地域コミュニティを含む「伝承を担い未来につなげるフィールド(伝承を担うフィールド)」と、新たに b)文化芸術基本法にも有機的な連携が図られるべきと明示されている福祉や教育、多文化共生等の「連携し多様な実践を展開するフィールド(実践を展開するフィールド)」の二つを想定した。伝統音楽・芸能に係るアートマネジメント人材育成には、これら二つのフィールドを知り、両者を繋いでいく役割が求められるという課題意識のもと、活動①(基礎講座)では各分野の専門家の協力を得て、多角的に学べる講座の展開が実現できた。また、活動②(実践セミナー)においては、伝統音楽・芸能を体験することでそれぞれの特長を学ぶとともに、ワークショップ等のノウハウも学んだ。9月に開始した活動③(企画制作研修)では、前年度(令和4年度)にすでに実践セミナーでフィールドワークを実施していた複数の伝統音楽・芸能団体、コミュニティを「伝承を担うフィールド」とし、障障者福祉、多文化共生、コミュニティマネジメントを「実践を展開するフィールド」として3つのプロジェクトを用意し、各フィールドへのフィールドワークとそれぞれのフィールドの関係者の協力を得ながら、企画立案・企画の実践に向けた準備をしている。</p>						

	申請時		達成状況	
事業の社会的な役割、効果	<p>上記目標には下記の社会的背景がある。2017年の文化芸術基本法改正において地方自治体の努力義務として「地方文化芸術推進基本計画」が明記され、2018年の文化財保護法の改正に伴い、「過疎化・少子高齢化などを背景に、文化財をまちづくりに活かす地域社会総がかりでその継承に取り組んでいくこと」「地域における文化財の計画的な保存・活用を促進するため、都道府県、市町村及び文化財の所有者・管理団体が積極的な役割を果たすこと」が示された。また、2021年4月には「社会の変化に対応した文化財保護の整備を図るため、無形文化財及び無形の民俗文化財の登録制度」の新設も決定したことから、今後ますます地方自治体の役割が増えるとともに、まちづくりに活用と地域全体としての継承の両方に通じた人材の育成が求められている。さらに、昨今各地で増えているアジア圏を含む「異文化コミュニティ」との共生と包摂は、現代日本の喫緊の課題となっている。伝統音楽・芸能は、我が国に住みさまざまな文化背景を持つ人々との共生、社会包摂の促進において大きな役割を担えるため、これらの課題を学び、実践に結び付けられる人材の育成が求められている。本事業では、まさにこれらの社会的な喫緊の課題に対応した、実践力の高い人材を育成することが狙いである。</p>		<p>◆9月末までのプログラムの中で事業の社会的な役割、効果に対する当初目標はすべて達成し、10月以降のプログラムに向けた準備においても達成している。</p> <p>本事業は、文化政策および文化財政策の観点から、「地域の文化的資源のまちづくりへの活用と地域全体としての継承の両方に通じた人材の育成と、多文化共生政策の観点から、「伝統音楽・芸能を核とした我が国に住むさまざまな文化背景を持つ人々との共生、社会包摂の促進に寄与する人材の育成」をとおして、社会的な喫緊の課題にしていこうと目指すものである。</p> <p>人々の移動と交流が激減したコロナ禍の3年間を経て、地域の民俗芸能や祭りを核とした観光のみに偏ったまちづくりや、異文化コミュニティとの共生と包摂は、新たな展開が求められている。伝統音楽・芸能の多くが活動の場をオンライン上に求め、LIVE配信の技術も急速に進んだが、こうした時代に改めて「フィールド(現地)におけるリアルな体験」を核とする本事業の役割の一つが、伝統音楽・芸能を体験することの価値を改めて示し、上記の転換期に置かれている地域の民俗芸能や祭り、異文化コミュニティと共に、これからの展開を考えることである。</p> <p>9月末までに実施した活動①(基礎講座)をとおして「伝承を担うフィールド」「実践を展開するフィールド」について事例をまじえて基礎的なことを学び、活動②(実践セミナー)の伝統音楽・芸能の体験をとおしてそれぞれの特質及びワークショップ等のノウハウを学んだ。これらをおとした学びを活かしながら、9月以降、活動③(企画制作研修)を展開しているところである。具体的には、「伝承を担うフィールド」と「実践を展開するフィールド」(障害者福祉、多文化共生、コミュニティマネジメント)をつなぐ3つのプロジェクトを用意し、それぞれにおいて「伝承を担うフィールド」と「実践を展開するフィールド」の2種のフィールド(現地)における「リアルな体験」を核としたフィールドワークを踏まえ、これからの展開を講師(ファシリテーター)、受講生、そして2種のフィールドの関係者が共に考えていくプログラムとなっている。以上により、これからの社会的な喫緊の課題に対応した実践力の高い人材を育成するための当初目標を達成した。</p>	
事業に関して学会発表、メディアでの掲載実績や予定	日本民俗音楽学会			
事業で得た課題や経験、今後の活用方法	<p>「伝承を担うフィールド」と「実践を展開するフィールド」の2種のフィールドをつなげて「ともにつくる」今年度のプログラムを展開していく中で、第一に、「伝承を担うフィールド」においては、すでに「実践を展開するフィールド」である福祉や多文化共生、教育等の視点をもった実践が行われていた例もあることが明らかになった。しかし、それらはその分野の専門的な理論とは結びついておらず、本事業をとおして、本来的に有している日本とアジアの伝統音楽・芸能の社会包摂機能をそれぞれの専門家とともに理論化し、方法論を構築していくことの意義が明確なものになった。第二に、本事業の展開においては、講師から受講生への一方的な学びではなく、講師と受講生、そして二つの伝承を担うフィールドの関係者らとの双方向的コミュニケーションを可能とする場の設定と、それを実現させるファシリテーターとしての講師の役割が重要であることが指摘できる。こうした場を設定とファシリテーターとしての能力は、本事業で育成するアートマネジメント人材にも求められていることから、それが受講生に明確に伝わるような工夫をしていきたい。</p>			
担当者所属・氏名	准教授・福田 裕美	電話	03-3982-3196	
		E-mail	bunka.am@tokyo-ondai.ac.jp	

活動①

講座名 企画名	基礎講座：フィールドとともにつくるための基礎講座							
講師名 出演者名	外部講師：柴崎かがり(音楽心理学：ポーツマス大学・東京音楽大学)、塩原麻里(コミュニティミュージック：東京学芸大学・弘前大学)、工藤傑史(障害児教育：東京福祉大学)、南田明美(芸術社会学アートマネジメント：静岡文化芸術大学)、タグチヒトシ(演出家)、伊野義博(音楽教育学：新潟大学)、田中桂(民俗芸能研究：特定非営利活動法人民俗芸能を継承するふくしまの会)、入江直子(民俗芸能研究：日本民俗音楽学会会員)、姫田蘭(映像記録：民族文化映像研究所) 学内講師：鈴木良枝(民族音楽学、ガムラン演奏家：東京音楽大学特任研究員)、小日向英俊(民族音楽学、シタール演奏家：東京音楽大学特任教授)							
日時	基礎講座配信：令和5年7月10日～令和6年1月31日 関連企画記録映画上映会 令和5年9月9日				コマ数	11コマ(1コマ90分)		
会場・教室	基礎講座 オンライン 関連企画記録映画上映会 東京音楽大学池袋キャンパスB館500教室				来場者	50	129	79
					育成対象者	50	100	50
育成対象者属性	属性	学生	実演家	文化施設職員	公共機関職員	民間団体職員	民間企業社員	その他
	人数	31	13	6	7	0	8	35
実施概要	基礎講座では、「伝承を担うフィールドとともにつくるための基礎講座」「実践を展開するフィールドとともにつくるための基礎講座」の二つの内容について、音楽心理学、コミュニティミュージック研究、民族音楽学、民俗芸能論、障害教育、芸術社会学アートマネジメント、音楽教育学、パフォーマンスアーツ研究など、各分野の専門家の協力を得て、社会とフィールドのつなげる方法を多角的に学べる講座を展開した。 10コマのテーマは以下の通りである。 「社会における音楽の機能について(音楽心理学)」「コミュニティミュージックという視点からみる音楽活動(コミュニティミュージック研究)」「障害児者の音楽による生涯学習支援と社会包摂(障害教育)」「多文化共生×アート：ケアとインターセクショナルリティに着目して(芸術社会学アートマネジメント)」「デジタルアートと伝統文化の出会い(パフォーマンスアーツ研究)」「学校教育と民俗音楽・芸能のフィールド(音楽教育学)」「競うことで磨かれ、継承されるバリ島の芸能(民族音楽学)」「南アジアの音楽とその拡がり-日本の視点から-(民族音楽学)」「福島県における三匹獅子舞の継承の事例～地域コミュニティと民俗芸能～(民俗芸能論)」「祭り囃子-伝承の実態-(民俗芸能論)」 これに加えて基礎講座関連企画として、民族文化映像研究所と共同で企画した「映像で記録する人々の暮らし」記録映画「奥会津の木地師」上映会を開催し、伝統の継承における映像記録が持つ意味について上映会を通して幅広い参加者と討議する場を得ることができた。							
アートマネジメント 人材育成目標	申請時				達成状況			
	事業全体としての人材育成の目標は、伝統音楽・芸能の伝承をめぐる課題、および地域が抱える課題に対応できるアートマネジメント人材の育成を行うことにあり、令和5年度はⅡ「フィールドとともにつくる」とし、伝承の現場から学んだことを活かしながら、伝統音楽・芸能と社会をつなぎ、伝承の未来につながることを視野に入れた企画制作の手法を検討し展開することにある。 その基礎講座として、現代社会に伝承の現場から学んだことをつなげるための専門分野からの多彩な問題提起を行い、それをふまえた、企画研修講座での受講生各自の問題設定に向けての理論的・実践的基盤とすることをめざした。				100名という、計画段階での数値目標の2倍もの受講生を得ることができたことは、本事業への社会的なニーズの高さを物語っている。また、その育成対象者属性の内訳をみてみても学生、実演家に加えて文化施設職員、公共施設職員、民間企業職員の受講数も多く、多彩な層での人材育成につながる可能性が感じられた。 実際に、基礎講座の受講を条件とした、活動②の実践セミナー、活動③の企画制作研修の講座では、社会とのつなげ方について、基礎講座での問題提起を受けた数多くの新基軸の提案が受講生からなされており、今後が期待される。			
活動で得た課題 や経験、今後の 活用予定	基礎講座の今後のあり方について、多くの示唆を得ることができた。基礎講座で、音楽心理学の立場からの「社会における音楽の機能について」というごく原理的な内容から、「競うことで磨かれ、継承されるバリ島の芸能」という、実践者からみた伝統音楽・芸能の社会的な位置づけ方まで、幅広いテーマで基礎的かつ実践的な内容の問題提起をおこなった。それにより、後に続く「企画制作研修」での受講生それぞれの意識そのものに、各自が自身の問題意識をもって取り組むという姿勢がみられたことから、改めて基礎講座の意義を感じることもできた。 現在進行中の「企画制作研修」で引き続き、基礎講座で学んだ多様な立場からの問題設定を活かしていくようなファシリテートのあり方を考えていきたい。							

活動②

講座名 企画名	実践セミナー：伝統音楽・芸能の体験							
講師名 出演者名	外部講師：富士元囃子(祭囃子)、丸橋広実(インド古典舞踊)、イ・ブトゥ・グデ・スティアワン(バリ・ガムラン)、サヌキ・サリ(バリ舞踊)、ガムラングループ響鋼(バリ・ガムラン) 学内講師：福田裕美(音楽文化教育：東京音楽大学准教授)、加藤富美子(民族音楽学、音楽教育：付属民族音楽研究所所長)、小日向英俊(民族音楽学、シタール演奏家：東京音楽大学特任教授)、金城厚(多文化音楽研究：付属民族音楽研究所教授)、鈴木良枝(民族音楽学、ガムラン演奏家：東京音楽大学特任研究員)							
日時	令和5年7月16日、7月17日				コマ数	3コマ(1コマ 90分、2日間)		
会場・教室	令和5年7月16日 東京音楽大学池袋キャンパス J館スタジオ及びB館500教室 令和5年7月17日 東京音楽大学池袋キャンパス J館スタジオ				来場者	30	26	-4
					育成対象者	30	26	-4
育成対象者属性	属性	学生	実演家	文化施設職員	公共機関職員	民間団体職員	民間企業社員	その他
	人数	11	2	0	2	0	1	10
実施概要	活動②では、活動①の基礎講座で身につけた知識を活かし、且つ、活動③における企画の実践を目指し、音楽・芸能を受講者自ら体験する。具体的な体験プログラムは以下の3つであり、受講者は可能な限り全てを受講するように促した。 【体験プログラム】 7月16日バリ島のガムラン音楽の演奏体験ーバリ島の獅子パロンの伴奏をしてみよう！(J館 Jスタジオ 参加者19名、見学者2名) 南インド古典舞踊モヒニアタムの体験ーダンスでインドの神々になろう！(B館500教室 参加者11名) 7月17日祭囃子の体験ー富士元囃子の祭囃子と獅子舞を体験してみよう！(J館 Jスタジオ 参加者16名)							
アートマネジメント 人材育成目標	申請時				達成状況			
	伝統音楽・芸能をマネージメントするにはそれらの特性を知る必要があり、見学のみならず、実際に身体を動かす、あるいは楽器を演奏するなどの「体験」が重要になる。これは、伝統音楽・芸能のフィールドワークにおいても欠かせないプロセスである。受講者は複数の芸能を体験することにより、活動③の企画制作研修において、比較の視点から個々の違いや選択した音楽・芸能の特徴を知ることができる。なお、体験プログラムの実施者・実施団体は、それぞれに初心者向けのワークショップや体験プログラムの豊富な経験を持っていることから、受講者がそれらのワークショップ/体験プログラム運営のノウハウを学ぶ機会となる。				受講生は伝統音楽・芸能の体験と共に、それぞれの文化的・歴史的背景を学ぶことによって、それぞれの芸能の理解を深められた。また体験プログラムについて豊富な経験を持つ講師陣から伝統音楽・芸能を学ぶことによって、受講生は効率よく芸能を体験し、ワークショップの手法を学んだといえる。特にガムラン音楽・インド舞踊、祭囃子という様々な芸能体験の場を設けられたのは、音楽大学ならではの試みといえるだろう。 受講後のアンケートには、アジアを中心とした民族音楽・舞踊、祭り囃子を体験する機会の貴重性、本講座のコンセプトの重要性について評価する声が多く上がっており、日本・アジアの伝統芸能の特色、共通点、相違点を理解するという、本講座の目標は概ね達成されたといえる。			
活動で得た課題 や経験、今後の 活用予定	日本やアジアの伝統音楽・芸能をマネージメントするためには、これらの参加人口や市場規模、実演家の収入構造に加え、伝統音楽・芸能の継承方法にまで考慮する必要がある。受講生は、実践セミナーにおいて芸能を体験することに加え、講師陣からそれぞれの伝統芸能の現地でのあり方や継承方法について学び、議論を行った。このような体験型のプログラムは、受講生がマネージメントの対象とする芸能の伝承に積極的に関わり、主体的にワークショップを運営するために有効であることがアンケートからも示され、今後もこのような場を設ける必要性を感じた。							

活動③

講座名 企画名	企画制作研修:フィールドとともにつくる							
講師名 出演者名	<p>【企画A:祭囃子をインクルージョン社会での生涯の学びにつなげるプロジェクト】 富士元囃子連中、貫井囃子保存会、柴崎かがり(英国ポーツマス大学心理学部准教授)、工藤傑史(東京福祉大学専任講師)、串田紀代美(実践女子大学准教授)、加藤富美子(東京音楽大学付属民族音楽研究所 所長)</p> <p>【企画B:獅子をつなぐプロジェクト～三匹獅子舞をつなぐ“ことば”の再発見～】 池田陽子(千葉県立美術館)、田仲柱(特定非営利活動法人民俗芸能を継承するふくしまの会)、小岩秀太郎(縦系横系合同会社代表)、江名の獅子舞、平岡鳥見神社の獅子舞、高野の獅子舞、長崎獅子連、石原のささら獅子舞 福田裕美(音楽文化教育:東京音楽大学准教授)、鈴木良枝(民族音楽学、シタール演奏家:東京音楽大学特任研究員)</p> <p>【企画C:日本とインドをつなぐ言葉とリズムーともに生きるための新しい音楽コミュニティづくりー】 ヨゲンドラ・プラニク(江戸川印度文化センター所長、指原一登(タブラー奏者)、伊賀並公佳(作曲家・即興音楽演奏者)、原豊(「日本語ふれあいひろば」日本語ボランティア)、小日向英俊(民族音楽学、シタール演奏家:東京音楽大学特任教授)</p>							
日時	令和5年9月～令和6年1月				コマ数	7コマ		
会場・教室	・企画A:貫井神社等(9/9、9/10) ・企画B:長崎神社(9/10)、中高生センタージャンプ長崎、豊島区児童相談所(9/27) ・企画C:江戸川印度文化センター(9/10)、代々木公園イベント広場(9/23、9/24) ※以上は9月実施分のみ記述					計画	実績	差
					来場者	30	25	-5
					育成対象者	30	25	-5
育成対象者属性	属性	学生	実演家	文化施設職員	公共機関職員	民間団体職員	民間企業社員	その他
	人数	15	3	0	0	0	1	6
実施概要	<p>【伝承を担うフィールド(伝統音楽・芸能団体、コミュニティ)のフィールドワーク】 各企画に関する伝統音楽・芸能団体、コミュニティの伝承現場に向き、フィールドワークを実施した。9月中に実施した内容は以下の通りある。</p> <p>・企画A:9/9、9/10は貫井神社及びその周辺において貫井囃子の祭礼を見学し、レパトリーなどに関するインタビューを実施した。また今後の企画制作研修の内容について確認を行なった。</p> <p>・企画B:9/10に長崎神社の例大祭の見学を行った。また9/27は中高生センタージャンプ長崎において、若い伝承者の練習の見学及び、身体の使い方についてインタビューを行い、続けて年長者も含めた練習を見学した。</p> <p>・企画C:9/10は江戸川印度文化センターにて、インドの生徒に日本人インド音楽家が伝統的太鼓タブラーを教える現場を見学し、インド音楽の理論、学習方法、楽器に関する基本的な知識を交換した。</p> <p>※欠席した受講生には、動画で情報を共有した。</p>							
アートマネジメント人材育成目標	申請時				達成状況			
	本事業では、伝統音楽・芸能の伝承をめぐる課題、および地域が抱える課題に対応できる人材の育成を目標としている。このような人材を育成するためには、伝承を担うフィールドと、福祉・多文化共生などに関する実践を展開するフィールドを深く知ったうえで、それぞれに課題を見出し、それらを解決する方法として企画制作がどうあるべきかを考える必要がある。これらを踏まえ、活動③では、伝承を担う場と実践を展開する場におけるフィールドワーク、企画立案のための集中講座、立案した企画の成果発表という三つのプロジェクトを柱にし、人材育成を行う。				活動③において9月30日までに終了したプロジェクトは、「伝承を担うフィールド」におけるフィールドワークである。企画A及び企画Bでは、各地域の祭礼に向き、関係団体により伝統音楽・芸能が伝承される様子を見学した。企画Cでは、在日インド人コミュニティが多く集住する江戸川区、および代々木公園でのインド文化イベントのフィールドワークにおいて、異文化由来の伝統芸能が本邦において新たな価値を有することを観察し、複眼的視点を有するアートマネジメント人材に必要な基本的知識を取得させたといえる。			
活動で得た課題や経験、今後の活用予定	現段階において受講者が得た知識は伝統音楽・芸能の特定の側面に限られる。今後、実践を展開する場でのフィールドワークや企画立案のための集中講座で学ぶことによって、受講生のそれぞれの課題をより深く、企画立案に役立てられると考えられる。							